

その人らしく暮らすために 私ができること

北川 誠治 [きたがわ・せいじ]

介護老人保健施設アロフエンテ彦根(滋賀県)



はじめに

私の勤める医療法人友仁会の老健施設「アロフエンテ彦根」は、滋賀県彦根市の琵琶湖のほとりにある施設です。彦根市の高齢化率は26.4%で、今後も上昇すると推計されており、介護の需要はますます高まっています。

当法人は1998年9月に、地域医療の拠点であった病院に、老健施設を中心とした介護部門を併設し、現在は、入所、通所リハビリ、訪問看護、通所介護、看護小規模多機能型居宅介護、居宅支援センター、地域包括支援センターを運営しています。当施設は彦根市唯一の老健施設であり、在宅復帰支援を実践する超強化型老健施設として、他の医療機関や介護サービス事業所と連携し、地域住民の暮らしを支える一翼を担っています。施設理念の「住み慣れた地域で、その人らしく生きるために、多職種協働して、平穏な暮らしを支える」を念頭において、その人らしく、また、住み慣れた地域で生活していけるようさまざまなサービスを提供しています。

私は2011年に当施設に入職しましたが、それまでは介護の仕事に携わっておらず、異業種からの転職でした。入職時は療養棟に配属となり、当初はなかなか仕事に慣れず戸惑うことも多くありましたが、上司・先輩職員の助言や同僚職員の支えもあり、経験を積みながら日々がんばることができました。現在は認知症専門棟に所属しており、勤続14年目になります。私がどのように考えながら毎日の業務に取り組んでいるかを記させていただきます。

業務について

現在、私は介護福祉士として、安全のための見守り・食事介助・排泄介助・入浴介助・日常リハビリ業務・

夜勤業務・日常リーダー業務・入所準備・入所受け入れ・退所準備・退所対応・レクリエーション等々、ご利用者に関わるすべての業務を担当しています。業務にあたる上でご利用者の残存能力を活かしつつ、適正な介護を行えるよう情報の共有やケアの統一化を図り、ご利用者に安心して安全な生活を送っていただけるよう、多職種間で連携して介護にあたっています。

介護福祉士が携わる業務はご利用者の生活全般に関わるが多いため、言動等に注意を払い、日常での小さな気づきで得られた情報を多職種間で共有し、日々のケアにとり入れていけるよう心がけています。

その人らしさを考えるきっかけ

私が入職した2011年は東日本大震災が発生した年であり、私もテレビでその様子を見ていました。実際に震災を経験していない私が想像する以上の苦労・苦難を経験され、いまなお苦難が続いている方もおられると思います。そんな時代にいかに「その人らしく」生きることができるか、私はどう関わっていけるのか。穏やかだった日常生活のなかで東日本大震災という出来事が起こり、想像もしていなかった苦難に立ち向かわれる方がいるなか、いままでは考えたこともない「らしく生きる」とは一体どういうことなのか。また、ご利用者が「らしく生きる」ために、私たち介護福祉士がどのように関わっていけるのか…。東日本大震災は、こうしたことを考えさせられるきっかけとなりました。

「らしさ」とは

「らしさ」とは一体どういう意味なのでしょう。よく使い聞く言葉ですが、改めて考えると意味の範囲

は広くとも深いと思います。「らしさ」とは、「他者ととられず自分の価値観や性格を尊重している状態」です。人が10人いれば10とおり、100人いれば100とおりの「らしさ」があります。もしくはそれ以上の「らしさ」があります。その人が生きてきた過程がそれぞれ違うので、「らしさ」もその人によって変わってきます。その人らしさを尊重し、ご利用者に穏やかな生活を送っていただくには、私たちにどのようなことができるのでしょうか。

私ができること

その人の生きてきた過程を知り、尊厳を守り、性格を把握し、よく話を聞き、意思を尊重する。文字に起こすととても大変なことに感じますが、介護現場の皆さんは日常的に行っていると思います。でも一方で100%行えているのでしょうか。

介護を行う側もまた人であり、「らしさ」もっています。いろいろな性格、得意不得意、個人間の関係性、体調の良し悪し等、人対人で行う業務のなかで100%のパフォーマンスを毎回発揮するのは難しいと思いますし、何より1人の力はたかが知れています。そこで必要なことは、職員全員を1チームとして考え、1人でできないところを補い合い、お互いに意見を言い合う。そんな、チームで対応できる職場の環境を構築していくことが、ご利用者の「らしさ」を引き出す大きな原動力になると私は考えます。

そこで日々心がけているのが、まず「挨拶」です。「報連相」など大事なことは他にもたくさんありますが、挨拶は良好な人間関係を形成し、信頼関係を築いていく上でとても大事だと私は思っています。とても基本的なことで昭和的な考えかもしれませんが、しかし大それた挨拶が必要だとは思いません。軽くでもいいと思います。

私自身は挨拶をしてくれない人には話しかけづらいですし、そういう相手に率直な意見が言えるかという私はなかなか言えません。率直な意見が必ずしも有益になるとは限りませんが、人は話し合えないとわかり合えないと思います。大の仲良しになるところまではいなくても、ある程度の関係性がなければ、良い意見交換もできないだろうと思います。

職員間で良好な関係性がある職場は雰囲気自然と明るくなり、ご利用者はそういったところも見てお



施設外観

られると思います。私が介護される側の立場なら明るい環境で生活したいと思いますし、きっとご利用者も同じように思われているはずです。

次に大事だと思うのは、「とりあえずやってみる」姿勢だと思います。安全な環境が担保されていて、なおかつ取り返しがつかないような事態にならないと予測されれば、何事もチャレンジするように心がけています。

一方で、何をしても自分の心に余裕がなければいけないと思っています。心の余裕がない職員側のいら立ちや焦りはご利用者には簡単に伝わってしまい、そんな環境で自分らしい生活はできないと思うからです。私は多忙なときほど「なんとかなるさ」と自分に言い聞かせて心に余裕をもつ努力をし、ご利用者や他の職員に焦りが伝わらないよう心がけています。

最後に

1人の力は小さいです。介護でも1人ですべてのことを行うのは不可能です。チームで介護に取り組み、チームで問題意識を統一し、ご利用者一人ひとりがその人らしく日々を穏やかに過ごし、当施設を選んで良かったと思っていただけるように、今後も明るい職場づくりを意識して、また職員の「らしさ」も大切にしながら業務にあたっていきたいと思っています。

今回このような文章の執筆をするにあたって題材を何にするかとても悩みましたが、入職したころの思いと、いまの思いを題材にして書かせていただきました。日々の業務に追われるなかで徐々に薄れてしまっていた初心を思い出し、再考できる機会をいただきありがとうございます。とても貴重な経験をさせていただきました。